

宇部市立図書館リニューアル基本構想



令和3年（2021年）3月

宇部市教育委員会

目次

はじめに	1
第1章 構想の位置付け	2
1. 構想策定の背景	2
2. 上位・関連計画との関係	2
第2章 宇部市らしい「読書のまちづくり」を目指して	4
1. 宇部市のまちづくりと社会課題	4
2. 改めて「読書」を問い直す	5
第3章 宇部市立図書館の現状と課題整理	7
1. 宇部市立図書館の現状と県内市立図書館との比較	7
2. 宇部市立図書館の今後の課題	9
第4章 基本構想の策定過程	11
1. インタビュー・フィールドワーク	11
2. 宇部市立図書館リニューアル市民委員会	12
第5章 リニューアルの基本方針	14
1. リニューアルのビジョン	14
2. ビジョンにつながるコンセプト	14
3. ビジョン・コンセプト実現に向けたアクションプラン	15
4. リニューアルに向けた検討課題	15
おわりに	17
資料編	18
1. 宇部市立図書館リニューアル第1回市民委員会	18
2. 宇部市立図書館リニューアル第2回市民委員会	21
3. 宇部市立図書館リニューアル第3回市民委員会	22

はじめに

「宇部市立図書館リニューアル基本構想」の策定にあたっては、図書館をただ単独施設としてリニューアルするだけでなく、図書館自体がまちづくりと関わり貢献し、市民の暮らしを豊かにする将来像を目指しています。これは、市立図書館の創立そのものが深くまちづくりの文脈と関連していることに由来しています。本市のまちづくりと深く関わる市立図書館の歴史を振り返りながら、将来の本市のまちづくりを考えた未来の市立図書館の基本構想へとつなげていきます。

本市は、明治維新という大きな時代の転換期において「自らの地域は自らの手でつくる」という強い自治意識が芽生えた地域です。江戸後期から採掘が始まった石炭を産業基盤として経済的自立を目指すなかで、性別や出自を問わず誰もが平等な存在として扱われ、共に働き栄えていく「共存同栄・協同一致」の精神が育まれました。

この中心的な役割を担ったのが、明治19年(1886年)に設立された「宇部共同義会」(以下、共同義会)です。共同義会は、石炭によって得た利益を社会事業に投資し、村立小学校(現・宇部高等学校)等の学校建設やときわ公園の整備を行ってきました。さらに共同義会は、明治38年(1905年)に宇部小学校2階を一部転用して「宇部図書館」を創設し、これが本市にとって初めての図書館となりました。その後、宇部村に寄付移管され、大正4年(1915年)に「宇部村立宇部図書館」となり、現在の市立図書館へとつながっています。

共同義会が体現した市民の強い郷土意識と共同体的精神は、本市の伝統として脈々と引き継がれ、戦後復興期における産業公害(ばいじん汚染)に対して「宇部方式」と呼ばれる独自の取り組みへとつながっていきます。まちの課題に対して、行政だけが立ち上がるのではなく、「産・官・学・民」の四者が相互に信頼し、連帯の精神とパートナーシップを核とした対話による取り組みを全国に先駆けて行ってきました。

市立図書館をはじめとする、今日の本市の地域経済と文化資源の基盤は、こうした強い郷土意識のもとでつくりあげられた自治コミュニティの流れを汲んでおり、本市の文化と歴史を伝承しつつ、現代における市民対話の場を守るとも重要な役割を担っています。

このように、共同義会と「宇部方式」は、いずれもまちづくりにおいて重要なことは、ひととひとが対話によって課題を発見し、共に学び協力し、相互成長するなかで解決するという、ひとづくりのプロセスでもあることを実践として示してきました。この流れを現代に継承する市立図書館は、次世代のまちづくり・人づくりを実践し、まちを育て、人を育て、地域社会の可能性を広げる施設として、まちの可能性を広げていきます。

第1章 構想の位置付け

1. 構想策定の背景

現在の市立図書館は、平成3年（1991年）市制施行60周年記念事業の一環として現・琴芝町へと移転開館しました。その後、「生涯学習の拠点施設」として、子どもから高齢者まで多くの方にご利用いただけてきました。現市立図書館は、開館以来30年を迎えますが、大きな改修等を行っておらず、耐用年数を超えた空調設備やエレベーターの施設更新の必要性、汚れや破損が目立つ椅子やカーペットの改修、利用者からの要望が多いトイレの改修等、質のよい図書館サービスの提供が難しくなっている現状があります。

さらに、図書館にとって非常に重要な役割である、よりよい情報環境の創出・提供という側面からも、現在の高度情報化社会、Society5.0等の社会背景は30年前と比較して大きな変化があり、同時に図書館に求められる役割も大きく変貌しつつあります。また、少子高齢化、人口減少等にもより、社会的要請への担い手不足も大きな課題となっています。こうした社会背景への取り組みとして、市立図書館がこれからも引き続き、「市民の誰からも愛され、役に立つ図書館」となれるよう、設備面だけではなく機能・サービス面も含めて全面的にリニューアルをする必要があります。

令和3年（2021年）11月、本市は市制施行100周年を迎えます。この100周年記念事業の一環として「市立図書館全面リニューアル事業」を掲げました。共同義会の歴史と伝統である「共存同栄・協同一致」の精神を踏まえ、市民とのパートナーシップのもと、対話を重視しながら、未来の市立図書館と本市のあり方を構想していきます。

2. 上位・関連計画との関係

平成22年（2010年度）から令和3年度（2021年度）までの本市のまちづくりの方針と基本的施策を整理し、本市が今後進むべき方向を示した「第四次宇部市総合計画」において、求める都市像を以下のように定めています。

求める都市像

みんなで築く活力と交流による元気都市

—地域資源を共有し、みんなの元気を発信する協働のまちをめざして—

この総合計画に基づき策定した、「第2期まち・ひと・しごと創生総合戦略」（令和2年度（2020年度）～令和6年度（2024年度））では、基本目標の一つである「ひとが集う、安心して暮らすことができる魅力的な地域をつくる」の中で、「質の高い暮らしのためのまちの機能の充実」を目指すため、「UBE読書のまちづくりの推進」を掲げていま

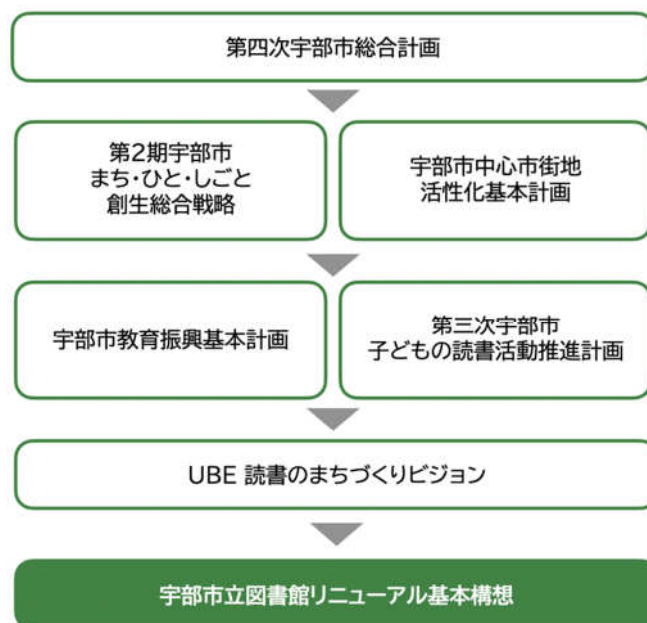
す。

この中では、図書館を中心に地域、学校、企業等、多様な主体をネットワーク化し、読書活動の普及啓発等を通して全市的な読書のまちづくりを推進することを示しています。また、市立図書館を拠点施設として、時代のニーズに対応したにぎわい創出につながる施設へのリニューアル整備を進めることを方針づけました。

また、中心市街地活性化基本計画（令和2年度（2020年度）～令和6年度（2024年度））においても、「新たな魅力を創出し、人が交流するまち」を掲げ、市立図書館には、読書のまちづくり拠点事業の拠点施設としての機能強化、にぎわい創出につながる施設整備が求められています。

これらの上位計画と教育振興基本計画及び第三次子どもの読書活動推進計画との整合性を図り、図書館の方針を検討していきます。具体的には、図書館を中心に、市民、学校、地域、事業者、関係団体等と連携し、全市的に読書のまちづくりを進めるため、アクションプラン（具体的な取組）を含めた指針として、令和2年（2020年）3月、「UBE読書のまちづくりビジョン」を策定しました。

この「UBE読書のまちづくりビジョン」の大きな柱の1つとして、「読書のまちづくり」の核となる市立図書館の全面リニューアルを掲げ、多様化する市民ニーズに対応した「知の拠点」、「集いの場」、「憩いの場」としての誰でも気軽に利用できる図書館に向けて取り組む指針として、「宇部市立図書館リニューアル基本構想」（以下、本構想）を策定します。



「宇部市立図書館リニューアル基本構想」は、基本構想策定に向け組織した「宇部市立図書館リニューアル市民委員会」の意見を参考に、現状と課題を整理するとともに、

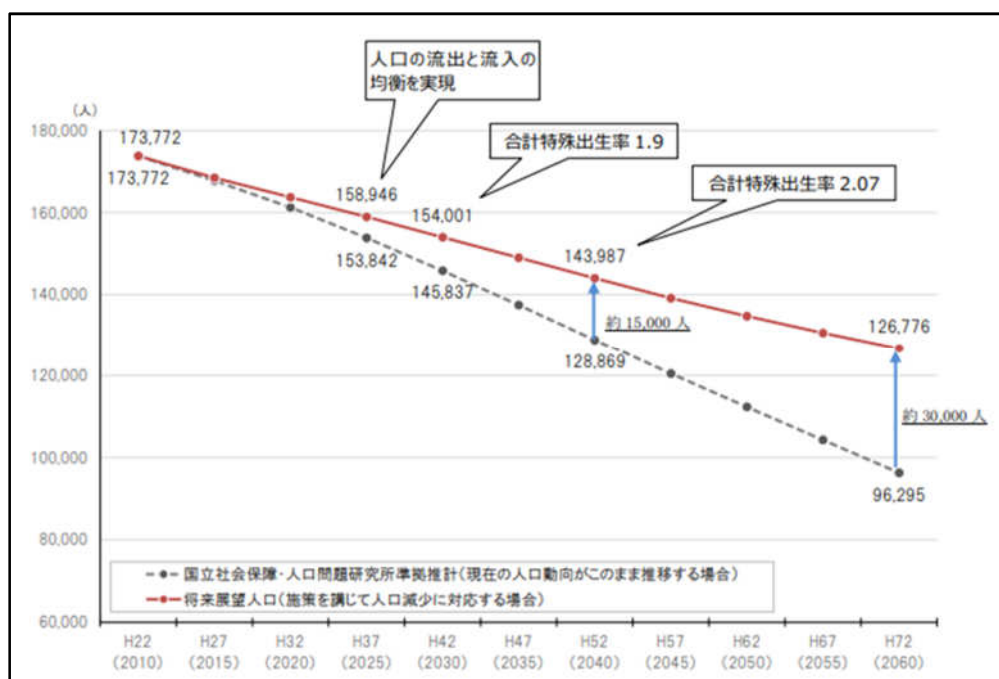
市立図書館の全面リニューアル基本計画の策定に向けた指針とします。同時に、令和2年（2020年）世界的に感染拡大した新型コロナウイルス感染症の影響は、これまでの図書館のあり方を見直すきっかけとなりました。「UBE 読書のまちづくりビジョン」の内容を改めて問い直し、ニューノーマル（新しい生活様式）に適合する図書館のあり方を検討していきます。

第2章 宇部市らしい「読書のまちづくり」を目指して

1. 宇部市のまちづくりと社会課題

総務省の自治体戦略2040構想研究会の報告によると、2040年頃にかけて地方自治体では、人口減少と高齢化による人口動向の変動に伴い、自治体職員の減少、地縁組織の弱体化、民間事業者の撤退等の数多くの課題が生じることがまとめられています。さらに、こうした人口減少下における地方自治体の役割は、これまでの「公共サービスの提供」から、「地域団体や民間企業等と連携した公共サービスを構築」への転換であると述べられています。多様化しながらも住民生活に不可欠なニーズへの対応が求められるため、AIやロボティクス等を積極的に活用し、自動化や省力化を図るスマート自治体への転換等が必要となることが報告されています。

本市においても、平成27年（2015年）10月に「人口ビジョン」を策定し、平成7年の182,771人をピークに減少に転じている総人口と、特に年少人口・生産年齢人口の減少、老年人口の増加等の本市の現状と課題をまとめるとともに、以下のとおり、本市の将来人口を示しており、人口減少を大きな課題としています。



こうした背景をもとに、令和2年（2020年）4月に策定した「中心市街地活性化基本計画」において、市立図書館をにぎわいと魅力あるまちづくりを目指すための「読書のまちづくり拠点」とし、図書館サービスの機能強化、にぎわい創出につながる施設整備を行うことが方針づけられました。この方針に基づき、「人口ビジョン」で指摘している社会課題と向き合いながら、「読書のまちづくり」を推進する施設整備を行っていきます。

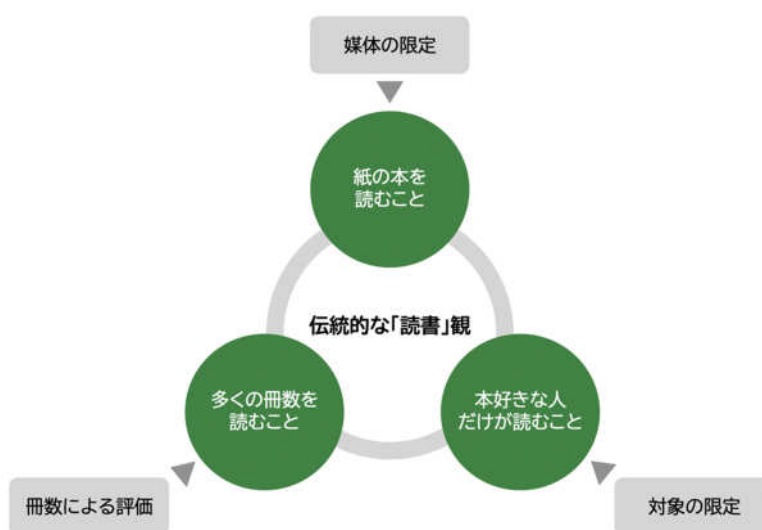
中心市街地（市役所周辺地区）に「新たな魅力を創出し、人が交流するまち」を目指し、求める都市像「みんなで築く活力と交流による元気都市ー地域資源を共有し、みんなの元気を発信する協働のまちをめざしてー」の実現に向けた検討を重ねていきます。

2. 改めて「読書」を問い直す

地方自治体にとって厳しい社会課題が山積している状況に加え、コロナ禍という社会状況のなかで、本市が求める都市像の実現のためには「読書」とどう向き合っていくとよいのでしょうか。一度立ち止まり、「読書」について問い直していきます。

これまでの市立図書館は、図書館としての伝統的な価値観を尊重し、紙の本や雑誌、新聞といった資料の収集と管理・保存に注力し、市民への貸出を推進するとともに、同時にこれらの資料を活用した学校等への読書活動支援も積極的に行ってきました。しかしながら、インターネットの普及によって人々が自由に情報にアクセスできる状況と、多様化する利用者のニーズに対して、紙ベースの資料を中心とした「読書」を支援するだけでは応えることが難しい実態があります。さらにコロナ禍はこの課題に直面するきっかけともなりました。緊急事態宣言が発出された2020年4月から5月にかけては、図書館も休館を余儀なくされ、図書館サービスを提供できない状況にもなりました。

こうした課題から、これまで図書館が考えてきた「読書」のあり方を改めて問い直し、伝統的な「読書」観として3つのポイントを整理しました。



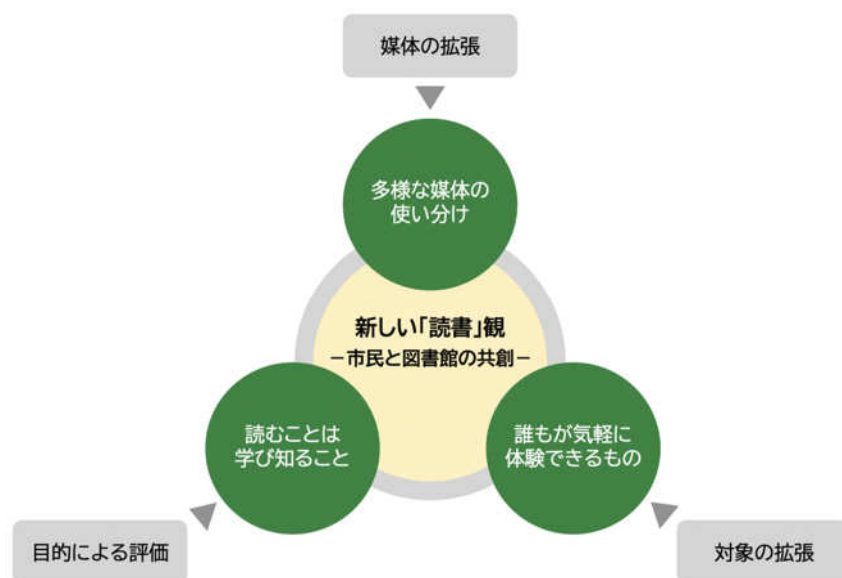
1 番目のポイントは、まずは紙の本を読むことが「読書」であるという媒体（メディア）の限定です。先にも触れたように、いま多くの人々はスマートフォンやパソコンを通して電子媒体による、場所や時間を選ばない読書体験を多く経験しています。紙の本を好む人もいれば、手軽にいつでも読める電子書籍を好む人もいます。

2 番目のポイントは、多くの冊数を読むことを推奨する「読書」です。多くの本に触れることと、ひとつの本をじっくり味わうことの良さを比較することは非常に難しく、どちらにもそれぞれの良さがあります。

3 番目のポイントは、「読書」をする対象を限定することです。「読書」は本や図書館が好きな人、勉強が好きといった一部の人のものとして考え、そうではない自分とは無関係だと思ってしまう人もいます。より多くの人々へ「読書」を届けるためには、「読書」の敷居を低くし、抵抗感を少なくしていく必要があります。

これらの整理は、これまで積み重ねてきた伝統的な「読書」観自体を否定するものではありません。むしろ、これまでの「読書」を問い直して見えた現状と課題から、これから本市にとってあるべき「新しい読書」の形を創造していくためのヒントとして捉えていきます。

こうした伝統的な「読書」観への課題意識から、「読書」という言葉を「紙の本を読む」という狭い意味だけでとらえるのではなく、「読むことによって知る、学ぶ、楽しむ」という広い意味での新しい「読書」観へととらえ直していきます。市民の対話によって、本市にとっての新しい読書のあり方を共創するプロセスを検討していきます。



検討の第一段階として、「宇部市立図書館リニューアル市民委員会」では、これからの「読書」と「まちづくり」のあり方を重要テーマとして扱い、市民委員と検討を進めました（詳細は第3章を参照）。ワークショップ形式で、それぞれのいまの読書体験や

読書環境について意見を出しあった結果、スマートフォンやパソコンといった多様な媒体を使い分けながら、仕事や学習、娯楽、余暇等の多様な目的（無目的も含む）に「読書」を柔軟に楽しむ行動や意識があることが見えてきました。

このような検討を今後も継続的に重ねていき、本市が目指す新しい「読書」観は、多様な媒体の選択やジャンルの選択、といった広い視点や新しい価値を加え、将来の本市で生活する市民とともにあるべき姿を想像・創造することが重要になります。市立図書館のリニューアルに向けては、この新しい「読書」観を継続的に検討しながら、具体的なプログラムを施設内・施設外に向けて展開していくことが求められます。

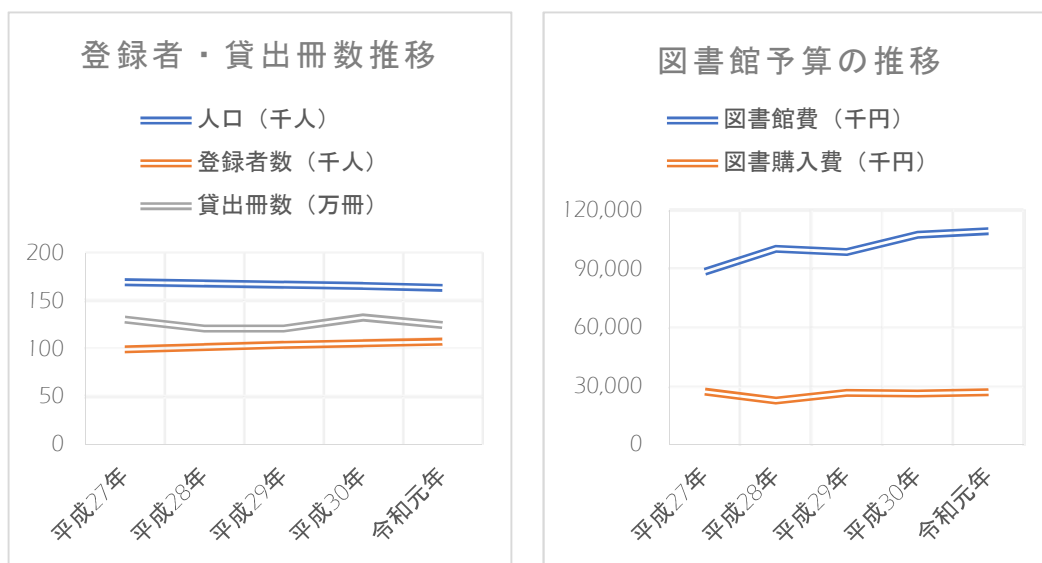
第3章 宇部市立図書館の現状と課題整理

第2章で整理した新しい「読書」観に向けて、現在の市立図書館の状況と今後の課題となる部分を、山口県内の市立図書館のサービス水準と比較検証しながら整理します。

1. 宇部市立図書館の現状と県内市立図書館との比較

1.1. 宇部市立図書館の利用状況

直近5年間の本市の人口動態と図書館の利用状況を整理します。令和元年度（2020年度）時点における図書館の利用登録者は105,510人で、人口に対する登録率は約65%です。蔵書冊数は419,712冊で、市民一人あたりの蔵書冊数は2.6冊となります。登録者1人当たりの貸出冊数は、平成27年の13.1冊からやや減少しており、令和元年時点では11.6冊となっています。また、図書館予算の推移は、図書館費全体では微増していますが、図書購入費はほぼ横ばいとなっています。



1.2. 県内市立図書館情勢との比較検証

山口県内の他市における図書館情勢と本市の現状を比較検証します。人口に対する貸出冊数について、本市は7.6冊であり、県内平均値は6.2冊です。また、人口に対する登録者数では、本市は64.5%であり、県内平均値は56.1%となっています。両指標とも平均値より高い数値であり、市民の認知・利用状況は一定の評価を得ている状況です。

一方で、本市の市民一人当たりの人口に対する蔵書冊数は2.6冊であり、県内平均値4.73冊に対して低い冊数となっています。この原因の一つとしては、図書購入費の低さが考えられます。本市の市民一人当たりの図書購入費は、163.8円と県内平均値243.7円に対して低い水準であり、蔵書と図書購入費の拡充が課題です。

市	人口	登録者	貸出冊数 (千冊)	蔵書数 (千冊)	蔵書数 一人当 (冊)	図書 購入費 (千円)	図書 購入費 一人当 (円)
下 関	259,208	127,217	1,333	769	3.0	52,571	202.8
山 口	195,561	161,435	1,391	687	3.5	48,806	249.6
宇 部	163,544	105,510	1,246	419	2.6	26,781	163.8
周 南	140,964	94,856	1,021	709	5.0	34,269	243.2
岩 国	131,865	54,212	1,165	651	4.9	37,237	282.4
防 府	114,450	38,554	538	495	4.3	26,100	228.0
山陽 小野田	61,417	48,658	391	347	5.7	13,385	217.9
下 松	56,423	44,030	597	206	3.7	13,924	246.8
光	50,012	12,923	261	199	4.0	15,174	303.4
萩	46,369	22,049	291	352	7.6	15,045	325.5
長 門	33,473	22,134	176	199	6.0	10,177	304.0
柳 井	31,528	23,976	97	119	3.8	4,910	155.7
美 祢	24,524	4,507	82	181	7.4	6,000	244.7
平均値	100,718	58,465	661	410	4.73	23,414	243.7

参考：「日本の図書館：統計と名簿2019」

また、職員数（正規・非常勤・臨時等をすべて含む）では、本市は35.4人となっており、これも県内平均値38.9人に対して低い数値となっています。各市が設置している分館数や開館時間等も職員の配置状況と密接に関係していると考えられますが、人口一万人当たりの職員数の比較においても、県内平均値4.2人に対し

て、本市は 2.16 人と非常に低い水準です。今後市民に広く利用をうながし、読書によるまちづくりとまちなかへのにぎわい創出の役割を担っていくためにも、十分な人員体制の確保が課題です。

市（図書館数）	人口	職員数	職員数 人口一人当
下 関（6 館）	259,208	82.3	3.18
山 口（6 館）	195,561	87.1	4.45
宇 部（2 館）	163,544	35.4	2.16
周 南（6 館）	140,964	74.8	5.31
岩 国（7 館）	131,865	58.8	4.46
防 府（1 館）	114,450	28.5	2.49
山陽小野田（4 館）	61,417	26.0	4.23
下 松（1 館）	56,423	16.5	2.92
光（2 館）	50,012	17.9	3.58
萩（3 館）	46,369	38.7	8.35
長 門（2 館）	33,473	16.3	4.87
柳 井（2 館）	31,528	14.9	4.73
美 祢（3 館）	24,524	9.5	3.87
平均値	100,718	38.9	4.20

参考：「日本の図書館：統計と名簿 2019」

2. 宇部市立図書館の今後の課題

2.1. 施設空間・環境と図書館サービスの連携の課題

基本的な図書館サービスと施設空間・環境のあり方が、現在の利用者の体験とうまく結びついていない様子が見受けられます。開館以来のレイアウトが維持されたまま、自動貸出機や予約取り置き棚等の新しい機器の導入も進めているため、リニューアルに向けてはこれらの機能と空間を全体的に見直す必要があります。

また、利用者からの閲覧席・学習席のニーズは年々高まっており、座席数の不足は大きな課題となっています。利用者のニーズに応じた快適な館内空間とサービスのあり方を整理するため、利用者の図書館体験に基づいた館内サービスの見直し（リデザイン）と空間づくりが課題です。

これは、館内だけではなく、館外のサービスのあり方についても同様であり、移動図書館車「あおぞら号」やまちかどブックコーナー、ふれあいセンター図書室といった広域サービス事業についても、それぞれの場所での利用が増え、利用者同士の相互交流につながるしかけを考える必要があります。

また、コロナ禍によって、非来館型の図書館サービスの需要も高まってきており、移動図書館車「あおぞら号」の積極的な利活用や電子図書館の普及・利活用計画を検討する必要があります。同時に、電子図書館サービスだけでなく、市民のコミュニティ活動をデジタル面から支える知識情報プラットフォームとして機能する図書館サービスのあり方も検討することが必要です。

2.2. まちづくりとつながる知識情報・交流拠点の課題

本市のまちづくりを支えるため、まちと市民とをつなぐ情報の収集・発信の取り組みに能動的に取り組む必要があります。現状では、市内の情報を収集したパンフレット等を入り口付近に設置・提供していますが、今後は多様な媒体を駆使しながら、まちの情報やひとの情報を可視化し、市民がまちを再発見できるような取り組みに注力します。市民が自分たちのまちに興味・関心を持ち、まちなかで自分らしく活躍できる知識情報・交流拠点としての機能が求められます。

近年、本市は移住希望都市としての人気が高まっており、移住者も積極的に受け入れる体制を構築しています。こうした移住者と本市に長く暮らしている市民をつなぎ、交流やコミュニティの拠点となれるよう、まちの情報を積極的に収集・編集し、発信していくことが重要です。特に、観光資源であるときわ公園や彫刻のまちづくり等の取り組みとの連携体制を強化しながら、まちの魅力を発信する知識情報拠点としての役割を担うことが求められます。

また、市全体としてのまちづくり施策・方針との連携も今後の課題であり、市民に近い行政サービスの窓口として、市民の健康や生活に必要な情報をつなぐ役割も重要です。特に、新型コロナウイルス感染症への対策や各種支援においては、確かな情報と市民をつなぐため情報発信に取り組み、市民の安全で健康な暮らしを情報の側面から支えることが課題となります。

2.3. 子どもたちの居場所・新しい学びの場づくりの課題

次世代を担う子どもたちにとっての行きたい場所、過ごしたい場所となれる場や環境づくりが求められます。伝統的な図書館像や「読書」観も大切にしながら、一方でそれらが利用のハードルとなってしまう子どもたちにとっても、居心地のよい空間づくりを目指す必要があります。家と学校以外のもう一つの居場所となれる図書館となるために、子どもたちが気軽に来館したくなる工夫が大切です。子どもたちが自分たちの好奇心のまま自由に知り、学べる環境づくりと資料収集が課題となります。

また、学校教育や学校図書館との連携も重視し、プログラミング教育等をはじめとする ICT 教育環境を支援する必要があります。デジタル人材・デジタルキッズの育成に向けて、子どもたちが自由に手にとって遊びながら新しい技術を学べる環境

と学習プログラムの実装が求められます。

以前より主に中高生を中心に学習席の拡充を求める声は高まっていましたが、昨年度からは感染症予防対策として、ソーシャルディスタンスを確保した座席レイアウトと利用制限を行なっていることから、学習席のさらなる不足が大きな課題となっており、さらに令和2年度末でまちなか環境学習館の学習室が閉鎖されることもあり、子どもも大人も安心して学べる環境づくりが求められています。

第4章 基本構想の策定過程

1. インタビュー・フィールドワーク

1.1. 職員グループインタビュー

実施日時：2020年9月30日（水）14:00-15:00

主に図書館業務の実務を担当している職員11名を対象に、グループインタビューを実施しました。職員として日々の業務を通して見えている課題や一市民としてこれから期待する図書館サービス等についてインタビューしました。



1.2. 市民団体グループインタビュー

実施日時：2020年10月31日（土）13:30-15:00、11月1日（日）14:00-15:30

市民団体グループ2団体、計12名を対象にグループインタビューを実施しました。

多様な活動を通して感じている本市のまちに対する意識を探り、今後図書館と団体の活動の連携の可能性について調査しました。

1.3. 小学生・高校生グループインタビュー

実施日時：2020年11月20日（金）18:00-19:00、11月21日（土）13:30-14:30

近隣の学校に通う小学生、高校生計5名を対象にグループインタビューを実施し

ました。特に市民委員会への参加が少ない若者にインタビューをすることで、若者たちの日常の暮らしや図書館への意識を調査しました。

1.4. フィールドワーク

実施日時：2020年11月22日（日）10:00-12:30、15:00-16:30

市立図書館1階を中心に、施設利用者や職員の活動を観察し、図書館サービスの実態と課題を整理しました。

2. 宇部市立図書館リニューアル市民委員会

【第1回市民委員会】

実施日時：2020年10月31日（土）10:00-12:00

参加者：35名

概要：未来の市立図書館でどのような利用体験ができるか、さまざまな利用者の立場になって自由に想像し、「利用体験ストーリー」を作成しました。世代間交流の場づくりや、図書館利用を通じた自己成長等、多様な利用体験ストーリーが生まれ、図書館の使い方や、場としてのあり方について可能性を広げることができました。

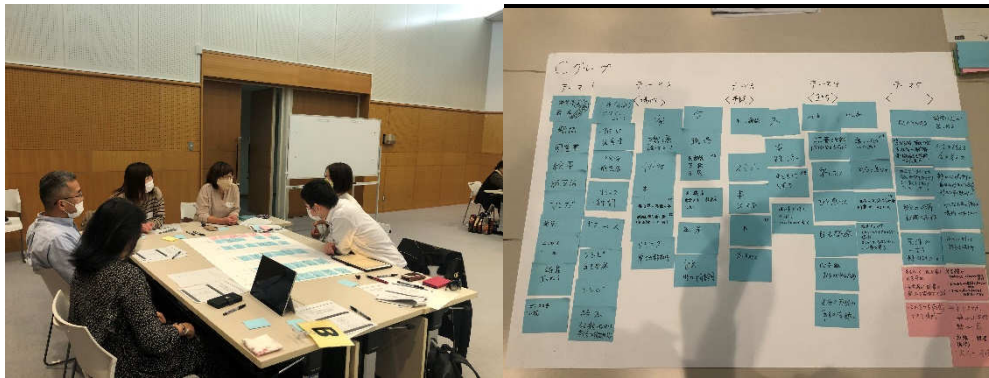


【第2回市民委員会】

実施日時：2020年11月21日（土）10:00-12:00

参加者：33名

概要：「これからの“読書”のあり方を考えよう」というテーマで普段の読書と、これからの読書のあり方についてグループディスカッションを行いました。ライフスタイルが変化するなかで、読書のあり方についても媒体や目的、シチュエーションが多様化していて、それに対応する図書館の空間やサービスが求められていることがわかりました。

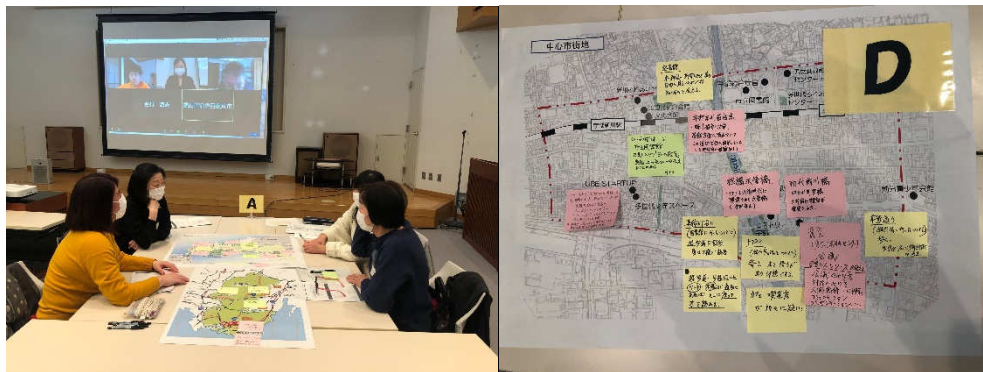


【第3回市民委員会】

実施日時：2020年12月19日（土）10:00-12:00

参加者：26名

概要：第1回、第2回で検討してきた、これからの「図書館」や「読書」がまちとどのようにつながるか、その可能性についてグループディスカッションを通して考えていきました。「読書のまちづくり」を考えたときに、現状は図書館が施設内で完結しているため、まちとの連携をする必要があるという課題が見えてきました。また、本市の豊富な資源やまちの魅力を活かすことができるのではないか、という可能性が感じられました。



第5章 リニューアルの基本方針

1. リニューアルのビジョン

知識や情報が循環する新しい読書環境の創造
ひととまちがつながり自己成長・表現できる、
まちなかの居場所

2. ビジョンにつながるコンセプト

2.1. 「知りたい」「学びたい」を支える情報収集・発信拠点

市立図書館は、紙の本を読む従来の読書の価値を大切にしながら、「新しい読書環境」として、紙だけではなくインターネットを活用した様々な媒体（メディア）を横断し、多様な知識や情報を収集し発信する拠点となります。図書館内だけではなく、まち全体に多様な「新しい読書環境」を創造し、広がっていきます。

新しい知識によって自分の視野や可能性を広げ、もっと学びたい、成長したいという思いを尊重し、あらゆる世代の市民の「学び」を支えます。「新しい読書環境」を作り出すことによって、本市で生活する市民にとって必要な仕事や学習・研究、芸術といった分野の情報集約・発信に注力し、市民一人ひとりの生活により密接する「読書のまちづくり」を目指します。同時に、「まちづくり」につながる「ひとづくり」を支えます。

2.2. ひとやまちとの新たな交流と創造を生み出す場

近年、本市では移住人口も増えてきており、昔から本市に暮らしている市民と新しく暮らし始めた市民が共に生活しています。古き良き伝統を守り伝えながら、一方で新しいこれからのまちづくりを考え、創造していくためには、相互の交流が重要です。市立図書館が本市のひととまちの情報を集めて発信することで、両者をつなぐ交流拠点となります。

こうした新たな市民交流によって、これまでなかった新しい取り組みや挑戦が創造される場となっていきます。これからの交流・創造拠点として、現実の図書館としての場とオンラインの場の両方からつないでいく役割を担うことを目指します。市民同士が学び合い、まちとともに成長する拠点として、市民の生活に寄り添っていきます。

2.3. 子どもから大人まで誰もが自分らしさを表現できる居場所

多世代の交流を通じて、誰にとっても自分のもう一つの居場所として感じられる居心地のよい空間を作り出します。図書館で得た知識や情報をもとに、自分らしさを表現する機会へとつなげ、子どもから大人まで誰もが新しい事柄にチャレンジできる環境を創造していきます。子どもと大人が最新の ICT 技術から郷土の歴史といった新旧の様々な事柄について、相互に教え合い、学び合う空間やプログラムを実装していきます。

2.4. これからのまちづくりを共に考える「現代版・宇部方式」の実践

郷土の歴史・産業・暮らしを知ることをつきかけとして、これからの本市のあり方について様々な立場を超えて平等に対話し、まちづくりを共に考える「現代版・宇部方式」の実践に取り組みます。市立図書館は市民による継続的な議論の場を保障し、中心市街地の活性化や産業振興、子育てといったまちが抱える様々な課題に対して自律的に向き合い、連帯する場と情報を提供します。

「共存同栄・協同一致」の伝統にならい、ひとづくり・まちづくり・ネットワークづくりに貢献し、市民に永く愛される図書館を目指します。

3. ビジョン・コンセプト実現に向けたアクションプラン

1. まちづくりに貢献できる図書館資料、サービスのあり方の検討
2. 市民に届く図書館情報の発信手法・広報手段を検討・実施
3. ときわ公園やUBE ビエンナーレ等、まちの重要な場所との連携手法の検討
4. 電子図書館等のデジタルでの図書館サービスの導入・活用方法を拡充
5. まちづくりと図書館のあり方を継続的に考える市民対話の組織・場の整備

4. リニューアルに向けた検討課題

ビジョン、コンセプト、アクションプランの実現に向けて、本市の市政方針と密に連携しながら継続的な検討課題・事項を整理します。

4.1. 中心市街地活性化の基本方針との連携

市立図書館も立地する中心市街地活性化の基本方針の検討が進められており、図書館のリニューアル方針は、より効果的なにぎわい創出に貢献するため、検討プロセスと密に連携し、図書館に求められる機能・サービスを検討していきます。

4.2. 感染症予防対策・非来館型サービスの検討

新型コロナウイルス感染症の拡大防止・予防のための対策は、今後の公共施設にとって欠かすことのできない課題です。アルコール消毒や検温等、現時点で可能な対策は講じていますが、今後の拡大状況は不透明です。リニューアルに向けては、より計画的な措置を継続的に検討し、市民が安心して利用できる施設のあり方を目指します。

4.3. 持続的なサービス基盤となる管理運営体制の構築

正規職員と会計年度任用職員が相互に密に連携し、市立図書館としての事業方針や運営方針を評価・検討していく体制づくりが求められます。すでに導入済みである電子図書館の利活用等、新しいサービスの導入・活用手法の検討については、職員研修を充実させ、よりよいサービスのあり方を継続的に検討していきます。

さらに、これらを持続的なサービス基盤として機能させていくためには、外部評価機関としての図書館協議会の役割も重要になってきます。市民とつながり、まちとつながる図書館運営をともに考えられる体制構築が重要です。

4.4. 他部署・他文教施設・市民団体との横断的な連携

まちづくり・にぎわいづくりに貢献する図書館のあり方を検討するため、まちづくり施策に関連する他部署との連携・情報共有を進めていきます。また渡辺翁記念会館や学校等、市内の既存文化・教育施設との連携方針を改めて見直し、さらにまちづくりにつながる市民団体と図書館の関係構築に努めます。

4.5. 適切な設計者選定手法の検討

ビジョンとコンセプトを実現するため、施設単独の提案ではなく、「まちなか」とどうつながり、どのようなにぎわい効果をもたらせるかを提案できる設計者選定手法を検討します。ハード面だけのリニューアルにとどまらず、ソフト面の提案を一体化させて提案できることを重視します。その際、これまでの市民との対話プロセスの積み重ねを重視し、選定手法においても対話等の新たな手法を検討します。

おわりに

「図書館政策は人づくりである。」

これは、国連が行った幸福度ランキング調査で、3年連続世界一の図書館先進国フィンランド・ヘルシンキ市長の言葉です。北欧の小国フィンランドは学校教育と図書館政策に力を入れ、成果を上げて注目されています。

一方、日本の幸福度ランキング（2020年）は、62位と大きく後退し、国民一人当たりのGDP（国民総生産）も、1990年代には世界で3～4位だったものが、2019年には世界で33位と大きく後退しています。

また、若い世代の「読書ばなれ」は顕著であり、3年おきに実施される学習到達度調査（PISA）世界ランキングの「読解力」においても、2015年が8位、2018年には15位と、その低下ぶりは顕著です。

このような中、国においても「働き方改革」、学校での学習指導要領の改訂等の対策も行われていますが、少子高齢化、人口減少が加速するとともにAI（人工知能）の進歩、グローバル化の進展等、社会経済情勢が急激に変化しています。今後、その対策は急務であり、有識者の多くが社会教育の重要性を訴えているように、「知識」の習得だけではなく、データやロジックに基づき、「考える力」、「探求する力」等が、より求められています。

現在までも、「読み聞かせ講座」、考えることの必要性を実感できる「哲学カフェ」をはじめ、人材育成、健康、環境などの市民の課題解決につながるイベント等の開催を行っていますが、更なる取組みが必要です。

知的創造空間である図書館においては、資料の収集・保存などの従来の機能に加えて、市民の課題解決、他部署との連携、交流・情報発信の拠点などのほか、読書活動の推進について、市民の多様なニーズ、子どもから高齢者まで多様な世代に対応した「人づくり」、「地域づくり」の拠点施設としての役割が期待されています。

「図書館政策は、人づくりである。」といった、かつて、「まちづくりは次世代を担う人づくり」という大きな理念のもと、学校や図書館づくりなどを積極的に行った渡辺祐策翁をはじめとする本市の先人達の想いを継承し、「共存同栄・協同一致」の精神をもって、市立図書館の更なる進化に向けて取り組んでいきます。

資料編

市立図書館のこれからのあり方を方針づける「UBE 読書のまちづくりビジョン」及び「宇部市立図書館リニューアル基本構想」の策定にあたっては、「UBE 読書のまちづくりネットワーク会議」及び「宇部市立図書館リニューアル市民委員会」での市民との対話を重ねてきました。

本市のまちづくりの歴史である共同義会同様、私たちのまちづくりについて、私たちが考えていくという伝統は、今後の検討プロセスにおいても引き続き継続していくべき重要な点です。こうした対話と議論の積み重ねをつなげて今後の計画に反映していくことを目標としながら、「宇部市立図書館リニューアル基本構想」における市民との対話の内容を資料編として整理します。

1. 宇部市立図書館リニューアル第1回市民委員会

実施日時：2020年10月31日（土）10:00-12:00

開催場所：市立図書館講座室、Zoom

参加者：35名（会場参加：27人、オンライン参加：8人）

テーマ：「これからの市立図書館を想像／創造しよう」

ワークショップ「市立図書館の利用体験ストーリーを考えよう」では、リニューアルした市立図書館でわたしたちがやりたいことを物語として描きだし、これからの図書館への期待や役割を整理しました。市民委員が作成したストーリーの一部を抜粋し紹介します。

1.1. 図書館空間の多様な使い方

- 自分の考え、意見を他人に話し、さまざまな人から意見をもらえる、オンライン説明会、意見交換イベント等の開催や友人と活発に議論できるスペースの利用（設定：20代男性、宇部市在住）
- 自由なスタイルで利用できる空間（机といすを例えばハンモック、ごろ寝、屋外空間）（設定：50代男性、市内在住）
- 小学生になった子どもと図書館でパン作りを体験。地元のパン屋さんと提携したイベントらしい。パン作りの本を借りて帰り、今度の休みに一緒に作る予定（設定：20代女性、乳幼児の子育て中）
- 音楽 CD コーナーの照明は明るくスペースは開放的で、下の段も楽な姿勢でゆっくり選べ、聴きたい CD を、コーヒー（設定：ドリップ式で100円程度）を館内で飲みながら、リラックスして CD を聴いている自分がいる（設定：70代男性）

1.2. IT を活用した、情報環境の整備

- 入口で渡された検索モバイルに、「女の子が好きそうな本」、「短い」と入力すると、

候補とこれまで読んだ人が書いた簡単な感想、おすすめ度、本のある場所がすぐに表示された。おすすめ度の高い本をとりあえず読んでみる。いつもならすぐに飽きるのに、この本面白い。みんなが勧めるだけあるな。青の子と感想を言い合えたらいいなと思ったら、意外と読み続けることができた（設定：小学校6年生男子）

- 無人配達ロボットが本の配達や自宅から図書館まで送迎（50代女性、市内勤務）
- 家の近所に本の受け取りBOXがあったり、電子書籍でいつでも読みたい本を読むことができるようになった（設定：40代女性）
- 歴史の根拠（諸元）となっている一次資料（古文書、古地図、写真、映像等）へのオンラインでのアクセスができる。地域出版、自費出版などの地域にしかない関連文献が外部から閲覧できる（設定：地域の歴史を学ぶ、調べる郷土史家）
- 市立図書館と学校図書室と校区の市民センターがオンラインでつながり、どこでも図書館サービスが使えるようになる。どの窓口でもサポートが受けられ、ITが苦手なおばあちゃんでも検索システムが使い、自分で予約や受け取りができるようになりとても喜んでいる。免許を返納しても本が借り続けられる。おはなし会もオンラインのリアルタイムで参加することができるので、女の子と弟と一緒に校区のセンターで参加できるようになっている。子どもたちの徒歩圏内に図書館につながる入り口があることで、とても便利になった（設定：小学生低学年の女の子）

1.3. 世代間交流の場づくり

- 年とともに人と会うことが少なくなり、図書館で異なる年齢層と本を通じて話せるというと思う（設定：市内在住、独居老人）
- いろいろな視点で選択された本が読める。読書好きの高校生や大学生のグループが選んだ本のコーナーが図書館及びインターネット（電子書籍）で読める。若者とシニアがお互いにどんなことに興味を持っているかを知り、相互理解の場になる（設定：50代）
- 多言語の情報提供、交流の場、機会が多い。図書館で仲間を見つけ、同世代、世代間で楽しめ、困ったことの解決サポートも（設定：市内で働き学ぶ外国人の家庭）
- 図書スペースとは別に自習できるスペースが確保されていて講義終わりや休日に作業しに行つて情報が欲しい時には情報スペースを利用することができる。ネット環境も完備されている。昼食として近くのお店を利用する。住民の方（高齢者や子育て世代等）とふれあうイベント等に休憩がてらに参加して、また会いたいと思える人ができ、まちとの接点をもつことができる（設定：大学生、県外出身、市内在住）

1.4. 非日常を感じられる空間

- 新しい図書館に中心市街地のにぎわいの拠点としての役割を期待し、そのためにお

しゃれなカフェ等、非日常を感じられる空間になることを求めている。

- 図書館でガーデンカフェをやっているとSNSで見つける。とてもインスタ映えする。次の週末、特に何の本を読むと決めていないが、面白い本のコーナーを見つけ、何年かぶりに小説を手に取り、本の世界にどっぷりとつかう（設定：20～30代独身男性）
- 最近、図書館がおしゃれになったんだって。近場でゆっくりおでかけ気分が味わえるみたい。ランチもできるし、ワークショップもあるんだってよ。1日過ごせるね！（設定：40代女性）

1.5. 図書館利用を通じた自己成長や、生活の質の向上

- 業務に集中したいとき、図書館の個室を利用している。セキュリティの高いインターネット環境もあり、資料や書籍の揃っていて、各種データベース、特許検索も利用できるのも、作業がはかどる。自分のノートPCも持ち込んで作業ができる。プレゼンに関する書籍、ドキュメント作りに関する書籍、文書作成に関する書籍なども質の高いものが揃っていて、分かりやすい資料が作成できる。パワーポイントやワードの使い方は、図書館の相談コーナーで指導してもらえる。おかげで残業時間が格段に減った（設定：20代、市内勤務）
- 要請や提案をするとなると、達意の文書を作成しなければならない。そこで宇部市に関する情報などファクトを調べたり、論点を検討したり、予測を示したりなど、知的作業に集中するために図書館を利用している。図書館の相談コーナーでは、文書の書き方、論理構成、表現方法などを指導してくれる。データベースにある過去の似たような事例も紹介してくれる。図書館は、市民活動を支援する体制になっている（設定：60代、市内在住）

1.6. 学生の居場所づくり

- 学校が終わったら友達と図書館に行く。勉強をみんなで教えあったり、読んだ本の感想を言い合ったりして、家でゲームをするより楽しい。休日も図書館で過ごす、とても居心地がよく二つ目の自分の家みたいだ（設定：15歳高校新入生）
- 学校帰りに図書館に寄り、勉強をする習慣になっている。勉強に集中できる環境があるからだ。時には、グループ学習室で友人と情報交換しながら勉強している。英語が苦手なので、どのように勉強したら良いかを知るために、アドバイスをもらえる図書館の相談コーナーで、参考になる書籍を紹介してもらったり、辞書などのツールを紹介してもらったり、Web上のリソースを紹介してもらったりしている。また、諸先輩が図書館のHPに残してくれている経験談もとても参考になっている（設定：市内の高校に通う学生）
- 学習スペースが広くなり、また参考書や赤本などの蔵書が増え、中学生・高校生の

学習しやすい環境が整い、学生の利用者が増加した（設定：中学生、高校生）

2. 宇部市立図書館リニューアル第2回市民委員会

実施日時：2020年11月21日（土）10:00-12:00

開催場所：市立図書館講座室、Zoom

参加者：33名（会場参加：25人、オンライン参加：8人）

テーマ：「これからの”読書”のあり方を考えよう」

ワークショップ「これからの”読書”のあり方を考えよう」では、私たちの普段の生活から読むこととの接点を多角的な観点から見直しました。そのうえで、これから私たちはどういった「読書」を求めていきたいのかを整理しました。市民委員の議論のなかででてきた「読書」のあり方について、要点を整理します。

2.1. 多様な媒体を使い分ける

- 健康に関する記事やレシピ等、生活に密着した身近なものから、仕事に関するものまで、多面にわたる読書を挙げていた。また、SNSの記事や、Wikipedia等、ネット上で読む文章や、講演会、座談会などリアルで体験して得た知識等、形式にとられない多様な読書の在り方を提示し、場所や目的に応じて柔軟に使い分けていることが読み取れる。

2.2. 気持ちを切り替えるための読書・読書をしている自分を楽しむ

- 娯楽や現実逃避等、リフレッシュすることを目的に読むことが多いため、普段とは違う非日常的な空間で読書をしたいという気持ちがうかがえる。眠るためにあえて読書をするという意見もあり、座り心地の良い椅子やねころがって読書ができる環境なども挙げられている。忙しい現代において、身心共に休めるためにも読書を通して意識的に「休む」という行為が必要だという意識がみられた。

2.3. 日常生活と読書の両立

- オーディオブックや、スマートスピーカーによる読み上げ機能等、耳で聞く読書にまつわる意見が挙げられていた。「生活の一部（家事をしながら）」という言葉や「いつでも、どこでも、何をしていても」というキーワードも出ており、日々忙しく時間が限られているからこそ、デジタルメディアも活用し、効率よく読書をしたいという意識がうかがえる。

2.4. 新しい知識によって自身を拡張する

- 仕事や趣味のために知識をインプットすることで、自分自身の幅を広げ、結果として生活を充実させたいという意見がみられた。また、現実を離れて別の世界へ移動

する、実際に体験できないことを、読書を通して追体験する等、読書によって自分の想像力や視野の幅を拡張したいという目的意識が読み取れた。

2.5. 新しい知識によって自身を拡張する

- 静かな場所で本を読みたいという意見や、反対にみんなで本について語れる場所があるといい、という意見もあり、誰と・どのように読書を楽しむか、という視点で語られていた。さまざまな利用者の、多様な読書のあり方を柔軟にとらえており、誰もが自分らしい読書空間を見つけられるよう、静かな空間とにぎやかな空間が両立した空間づくりへの期待がうかがえる。

2.6. 社会とつながり、知識を循環させる

- 読書を通して知識を得ることをゴールとせず、情報発信をしたい、活動をしたいという次のアクションまでつながっており、一方的に知識を得るだけでない、読書の相互的な働きへの意識が読み取れた。

3. 宇部市立図書館リニューアル第3回市民委員会

実施日時：2020年12月19日（土）10:00-12:00

開催場所：市立図書館講座室、Zoom

参加者：26名（会場参加：17人、オンライン参加：9人）

テーマ：「これからの”読書のまちづくり”を想像／創造しよう」

ワークショップ「これからの”読書のまちづくり”を想像／創造しよう」では、市民のお気に入りの場所を紹介しあい、どういった場所が愛されるのか、その要因はなにかを探っていきました。同時に、まちに眠る様々なひと・もの・ことの情報と図書館がどうつながっていくとよいのかを考えました。市民委員の議論のなかででてきた読書のまちづくりのヒントについて、要点を整理します。

3.1. まちなかの施設をつなぐ情報拠点の役割

- お気に入りの場所として、ヒストリア宇部、男女共同参画センター・フォーユー、多世代ふれあいセンター等、市の公共施設が多く挙げられていた。本市は既に、市民の居場所となるような場所を複数整備しているが、それぞれの認知度が不十分で、施設間の連携も希薄であるため、図書館と他の公共施設をつなぎ、情報発信拠点の役割を担うことが求められていると考える。また、既存の「まちかどブックコーナー」をより魅力的な企画に改善することで、図書館とまちをつなぐ機能になるのではないかと考える。

3.2. まちづくりの拠点とつながることで、まちにひらかれた図書館になる

- 一部の市民活動に積極的な参加者からは、お気に入りの場所として、うべスタートアップや、若者クリエイティブコンテナ、コンフリ宇部等、まちづくりの拠点が挙げられていたが、一部の人にしか使われていない状況が推察された。これらの拠点と図書館がつながり、各施設の認知度を向上し、間口を広げることができるのではないかと考える。また、図書館が能動的にまちづくりの拠点とつながることで、図書館としてもまちづくりに参加し、まちにひらかれた図書館になりうると考える。

3.3. 公園や空港との連携により、市民とのタッチポイントを増やすことができる

- お気に入りの場所としてときわ公園やその他の身近な公園を挙げる人が多く、市民にとって公園が身近であることがうかがえる。図書館が公園と連携し拠点の一つとして活用することで、市民とのタッチポイントを増やすことができるのではないかと考える。また、本市の魅力のひとつとして山口宇部空港が市街地と近いことも挙げられるが、図書館と空港が連携することで、市外・県外の人に向けた情報発信を強化できるのではないかと考える。海外の事例で、オランダのスキポール空港にある「空港図書館」や、空港から電子書籍貸出サービスを利用できるカンザス州立図書館の取り組みがある。こういった取り組みも、空港と市街地の距離が近い本市だからこそ実現の可能性があるのではないかと考える。また昨年開始した電子図書館サービスの認知が広がり、利用増加も期待できる。

3.4. 潜在的にアートへの関心が高く、文化的な土壌を活かした情報発信が求められる

- 市外のお気に入りの場所として、市外・県外の美術館が挙げられていた。本市は、「UBE ビエンナーレ」を開催し、潜在的にアートへの関心が高いことがうかがえるが、現状の施設・機能では不十分であると感じ、市内にはない施設や機能を求めているとも考えられる。こうした背景をふまえて、今後「UBE ビエンナーレ」も含めたアート関係の情報発信は強化する必要があると考える。また、現状では図書館と「UBE ビエンナーレ」との連携も弱いため、本市の彫刻の取り組みが、まちなかで普段から身近に感じられる拠点として整備する必要があると考える。

3.5. 宇部市の魅力を再発見し、外部に発信する機能が求められている

- 今回のワークショップで、市外の人間が知らない場所を多く知ることができた(ex. 永山本家酒造、船木宿、琴崎八幡宮等)。こうした地元の人しか知らないような情報も貴重な資源であると考え。本市には、ときわ公園や渡辺翁記念会館等、有名な名所が多いからこそ、埋もれている隠れた魅力を再発見し、再発信していくことも重要ではないかと考える。こうした情報を市民が持ち寄り、共有する場として図書館が機能することで、市民を中心とした協働での情報発信も可能になると考える。



令和3年 宇部市は100周年を迎えます
